羅什訳『法華経』の語学的研究
—介詞“以”について—

椿　正美

0. はじめに

漢語で用いられる介詞は、対象を示す語彙の直前・直後に置かれて句（sentence）を形成し、対象の内容を表示または導き出す効果を発揮する。現代漢語では〔“在（～で）”＋“中国”＋A〈動詞〉〕（中国でAをする）の“在”、〔“給（～に）”＋“你（あなた）”＋A〈動詞〉〕（あなたにAをしてあげる）の“給”がそれに当たり、鳥井2008：133によれば、介詞の対象に当たる語彙が示す内容には、主導者、受動者、関与者、時間・場所、目的・手法・方式、根拠が含まれている。

古典漢語の場合、対象が時間・場所を示す語彙の介詞には“自”“於”等、根拠を示す語彙の介詞には“自”“為”等が用いられ、適用される条件が特に幅広い介詞には、目的・手法・方式等を導き出す“以”が挙げられる。例えば、『孫子』「軍争」“以近待遠、以佚待労、以飽待飢、此治力者也（「近きを以て遠きを待ち、佚を以て労を待ち、飽を以て飢を待つ、此れ力を治むる者なり」）。”では、三種類の“以”は“近”“佚”“飽”に前置され、行為を表す“待”の工具または方法を導き出す句〔“以”＋名詞〕が形成されている。

本稿では、成立時期を弘始８年（406）とする鳩摩羅什（Kumarajiva）訳『妙法蓮華経』全７巻（以後は略称『法華経』を使用）の文中に於ける介詞“以”の使用状況を調査対象とし、多用された形式の表示効果について古典漢語の語法研究の立場から分析する。

1. “以”の字形と字義

まず、“以”の字形と字義について確認する。“以”の字形は「人」を表す意符“人”と音符“㠯”から形成されている。但し、“㠯”は「耜（すき）」を表現する象形文字でもあるため、“以”全体は会意兼形声文字と捉えられる。字義については『説文解字』に“用也（「用ふるなり」）”と記され、耜を持つ人、道具を使用して働く意等を示し、借りて動詞「用いる」の意に用いられたと判断される。

動詞として用いられた“以”は、やがて介詞としても用いられるようになる。世界の言語に用いられる前置詞には、本来の語義に前置詞としての機能が既に含まれていた「一次前置詞（primary preposition）」、他の品詞から派生した「二次前置詞（secondary preposition）」があり、以上のような変遷を経た介詞“以”の場合は明らかに「二次前置詞」に含まれる。張玉金2004：130によれば、西周時代（紀元前1050年—同771年）に用いられた介詞“以”は、事物を

与える相手または関係が及ぶ相手、行為の受け手や同伴者、工具、理由、原因等、様々な内容を含む語彙が対象となっている。

2.『法華経』文中に見られる介詞“以”の使用例

黎錦熙1998：148の分類によれば、介詞の種類には、必要とする方法や他者との共同または比較等の関係を表現する「方法介詞」、人や事物等を表す語彙を対象として原因や動機を表現する「因縁介詞」が含まれ、前者の中で行為に必要となる材料または工具を導き出す類、後者の中で原因や動機（つまり目的）を導き出す類に“以”は属している。『法華経』文中では、工具や方法、原因や理由を示す語彙に“以”が前置された例が多く見られ、少数ではあるが時間の経過や開始を表現する場合にも“以”は用いられている。

本章では、以上３種類の内容を導き出す“以”の『法華経』文中に於ける使用例を掲示し、それらの使用状況と表示機能について分析する。

2. 1. 工具・方法

牛島1967：264は、古典漢語の介詞について、述語成分の限定を表現する「普通介詞」、限定と補語の何れにも用いられる「特別介詞」に分類し、“以”は後者の「手段を表すもの」に含まれている。『法華経』文中に見られる介詞“以”の使用例では、行為の工具や方法を示す語彙に前置された形式が最も多く見られる。これを含む動詞句は、次のような構成となっている。

{“以” + A（名詞）} + B（動詞）

工具・方法　　行為　　Aを使用してBをする

例えば、『韓非子』「難一」“以子之矛陷子之楯、如何（「子の矛を以て子の楯を陷さば、如何」）。”では、“子之矛”が工具、“陷子之楯”が行為に当たり、“以”は黎錦熙1998：148の設定する「方法介詞」に属すと判断される。

ここでは、工具や方法を導き出す“以”の用法について記す。

2. 1. 1. 使用例

“以”の対象となる語彙の性質は、全て具体的とは限らず、抽象的な性質を帯びた語彙の使用も多く見られる。まず、“以”が具体的事物を示す語彙に前置された例文を次に挙げる[1)]。

(1)T09-0009A

若人散乱心、乃至以一華、供養於画像、漸見無数仏。（方便品）

若し人散乱の心に、乃至一華を以て、画像に供養せし、漸く無数の仏を見たてまつりき。

(2)T09-0031A

応以天華香、及天宝衣服、天上妙宝聚、供養説法者。（法師品）

天の華・香及び天宝の衣服、天上の妙宝聚を以て、説法者に供養すべし。

(3)T09-0034A

若以足指、動大千界、遠擲他国、亦未為難。(見宝塔品)

若し足の指を以て、大千界を動かし、遠く他国に擲んも、亦未だ難しとせず。

上の例文では、(1)“一華”(2)“天華香及天宝衣服天下妙宝聚”(3)“足指”が工具に当たり、その行為には(1)(2)共に“供養”、(3)“動”が当たる。

張玉金2004：151は、工具を導き出す介詞の種類には「行為の工具を導き出す種」「行為の連帯者を導き出す種」があると指摘しているが、『法華経』に用いられる“以”は全て前者に属している。この他、文中には具体的事物を示す語彙として“七宝”“瑠璃”、また“大車”“大乗”等の使用も確認される。

次に、抽象的事物を示す語彙に前置された例文を挙げる。

(4)T09-0017C

仏知我等、心樂小法、以方便力、随我等説。(信解品)

仏我等が心小法を楽うを知しめして、方便力を以て我等に随って説きたもう。

(5)T09-0047C

以是功徳、荘厳六根、皆令清浄。(法師功徳品)

是の功徳を以て六根を荘厳して皆清浄ならしめん。

(6)T09-0054C

善男子、百千諸仏、以神通力、共守護汝。(薬王菩薩本事品)

善男子、百千の諸仏、神通力を以て共に汝を守護したもう。

上の例文では、(4)“方便力”(5)“是功徳”(6)“神通力”が工具に当たり、(4)“説”(5)“荘厳”(6)“守護”が行為に当たる。この他、文中には“方便”を含む語彙として“方便”“是方便”“斯方便”“諸方便”“無数方便”、また“神力”を含む表現として“神力”“仏神力”“諸神通力”等の表現も使用されている。

書き手が工具や方法の内容を尋ねる疑問や反語の表現にも“以”は用いられ、その場合は対象となる部分に疑問詞“何”と名詞“法”を連結させた“何法”が当てられる。『法華経』文中では、「薬草喩品」“以何法念(「何の法を以て念じ」)”“以何法思(「何の法を以て思し」)”“以何法修(「何の法を以て修し」)”が使用例として挙げられる。

2. 1. 2. “以”が省略された形式

工具や方法を導き出す句の中には、対象となる語彙に“以”が前置されない形式も存在する。この現象は、文字の配列に於ける“以”の省略と解釈され、工具や方法を導き出す表現に見られる独特の形式と判断される。

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(7)T09-0026A

但是如来、方便之力、於一仏乗、分別説三。(化城喩品)

但(ただ)是れ如来方便の力をもって、一仏乗に於て分別して三と説く。

(8)T09-0049C

大小転輪王、及千子眷属、合掌恭敬心、常来聴受法。(法師功徳品)

大小の転輪王及び千子眷属、合掌し恭敬の心をもって、常に来って法を聴受せん。

例文中の(7)“方便之力”は工具、(8)“恭敬心”は方法を示し、それを導き出す表現を形成する場合、本来ならば各語彙には“以”が前置されるべきである。ところが、それは共に省略され、行為として(7)では“説”(8)では“聴受”のみが後続されている。

“以”が省略された箇所の有無、またはその位置については全体の文意から推定しなければならない。但し、(8)の場合は、類似した内容“諸天龍夜叉、羅刹毘舎闍、亦以歓喜心、常楽来供養。(「諸の天・龍・夜叉、羅刹・毘舎闍、亦歓喜の心を以て、常に楽って来り供養せん」)。”が直後に続くため、そこに含まれる“以歓喜心”との関係から(8)“恭敬心”直前の部分が“以”の省略された箇所であると容易に判断される。

2. 2. 原因・理由

王力1963:1074では、介詞“以”の説明として「“以”を含む介詞構造は工具や方式等を表示する」だけでなく、「“由”とは類義語である」とも記されている。“由”とは原因や理由を掲示する際に用いられる語彙であり、行為の実現や状態の発生を促す根拠を導き出す表現に当たる。これを含む動詞句は、次のような構成となっている。

{“以” + A(名詞)} + B(動詞)

原因・理由　　行為　　AであるためにBをする

例えば、『論語』「衛霊公」“君子不以言挙人、不以人廃言(「君子は言を以て人を挙げず、人を以て言を廃せず」)。”では、“挙人”“廃言”それぞれの理由に当たる語彙“言”“人”に“以”が前置されている。

『法華経』文中では、行為や状態の原因や理由を導き出す表現として、「所縁」を意味する語彙“因縁”が“以”の対象となる形式、また“故”が対象に当たる語彙に後置される形式の多用が確認される。ここでは、各形式の使用状況と表示効果について記す。

2. 2. 1. “因縁”が対象となる形式

既述の内容が原因や理由に該当する場合、“以”の前置によってそれを導き出すには、“因縁”に近称指示詞“是”が連結された“是因縁(この理由)”が対象となる形式も使用される。

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(9)T09-0002C

以是因緣、地皆厳浄、而此世界、六種震動。(序品)

是の因縁を以て、地皆厳浄なり、而も此の世界、六種に震動す。

(10)T09-0015A

以是因緣、十方諦求、更無余乗。(譬喩品)

是の因縁を以て、十方に諦かに求むるに、更に余乗なし。

(11)T09-0029A

以是因緣、甚大歓喜、得未曽有。(五百弟子授記品)

是の因縁を以て、甚だ大いに歓喜して未曽有なることを得たり。

上の例文では、何れも“是因緣”が原因に当たり、(9)“厳浄”(10)“求”(11)“歓喜”が行為または状態に当たる。この他、文中には“諸因緣”“種種因緣”の使用も確認される。

また、“因緣”は疑問詞“何”に修飾され、“以何因緣”を形成して疑問文または反語文に使用されることもある。『法華経』に見られる例文を次に挙げる。

(12)T09-0024B

今以何因緣、我等諸宮殿、威徳光明曜、厳飾未曽有。(化城喩品)

今何の因縁を以て、我等が諸の宮殿、威徳の光明曜き、厳飾せること未曽有なる。

(13)T09-0040B

是従何所来、以何因緣集。(従地涌出品)

是れ何れの所より来たれる、何の因縁を以て集れる。

(14)T09-0056C

世尊、観世音菩薩、以何因緣、名観世音。(観世音菩薩普門品)

世尊、観世音菩薩は何の因縁を以てか観世音と名くる。

上の例文では、(12)“曜”(13)“集”(14)“名観世音”が行為または状態に当たり、その原因または理由を尋ねる表現として“以(何)因緣”が用いられている。

2. 2. 2. “故”が後続される形式

原因や理由を導き出す表現には、〔“以”+A(名詞)〕に“故”が後置された形式も存在する。例えば、『春秋左氏伝』「襄公」“晋侯以我有喪故、未之見也(「晋侯、我の喪有るを以ての故に、未だ之を見ず」)。”では、“未之見”の理由として“我有喪”を導き出すために“以〜故”が用いられている。

『法華経』に見られる例文を次に挙げる。

(15)T09-0029A

我久令汝等、種仏善根、以方便故、示涅槃相。(五百弟子受記品)

我久しく汝等をして仏の善根を種えしめたれども、方便を以ての故に、涅槃の相を示す。

⑯T09-0038B

於一切衆生、平等説法。以順法故、不多不少。(安楽行品)

一切衆生に於て平等に法を説け。法に順ずるを以ての故に、多くもせず少くもせざれ。

⑰T09-0060C

以功徳智慧故、頂上肉髻、光明顕照。(妙荘厳王本事品)

功徳・智慧を以ての故に、頂上の肉髻、光明顕照す。

上の例文では、⑮“方便”⑯“順法”⑰“功徳智慧”が原因または理由に当たる。この他、文中には“一仏乗”“如来”“仏神力”、また“不受一切法”“聞香力”“常見我”“持法華”等の表現も“以”の対象として使用されている。

この他、“以～故”は上述の“因縁”が対象となる表現も形成する。『法華経』に見られる例文を次に挙げる。

⑱T09-0003B

以是因縁故、号之為求名。(序品)

是の因縁を以ての故に、之を号けて求名と為す。

⑲T09-0007A

諸仏世尊、唯以一大事因縁故、出現於世。(方便品)

諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもう。

⑳T09-0045A

以是因縁故、能生諸禅定、八十億万劫、安住心不乱。(分別功徳品)

是の因縁を以ての故に、能く諸の禅定を生じ、八十億万劫に、安住して心乱れず。

⑲では“一大事因縁”⑱⑳では既に述べた“是因縁”が原因または理由に当たる。

2. 3. 時間

介詞“以”の用法には、時間を表す語彙を対象とし、行為や状態の発生する時間を表現する形式も存在する。これを含む動詞句は、次のような構成となっている。

{“以” + A (名詞)} + B (動詞)

時刻　行為　Aの時に(から)Bをする

例えば、『史記』「孟嘗君列伝」“文、以五月五日生(「文、五月五日を以て生まる」)。”では、“以”に前置された“五月五日”が“文(孟嘗君)”の生れた時期に当たる。

この表現では、既述の時期を示す近称指示詞“是”が対象となる形式も存在する。『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

㉑T09-0011A

以是於日夜、籌量如此事。(譬喩品)

是を以て日夜に、此の如き事を籌量しき。

(22)T09-0011B

以是我定知、非是魔作仏。(譬喩品)

是を以て我定めて知んぬ、是れ魔の仏と作るには非ず。

(21)では“籌量如此事”、(22)では“我定知”の時期が“以是”によって表現され、何れの場合も既述の時間帯が“以”の対象となっている。但し、それらの示す期間は微妙に異なり、(22)“以是”には既述の時期のみが含まれて「この時」が表現されるが、(21)“以是”では既述の時期が起点となって「これから」が表現される。

同じ近称指示詞である“此”には、事態を直接に指示する機能〈直指〉が含まれ、これと比較すれば、間接に指示する機能〈承指〉が含まれる“是”の場合は、指示内容の柔軟性が濃厚である。従って、“是”の対象に当たる事態の条件は幅広く、「現時点」「現時点から始まる期間」の両条件を満たす時間帯を示すには適切な表現と考えられる[2)]。

3. “以”を含む様々な形式

介詞“以”の使用によって上述の内容を導き出す表現は、対象に“以”が前置されて動詞が後続された形式だけではない。本章では、〔“以”＋名詞〕と動詞との間に連詞“而”が挿入された“以～而～”、対象に“以”が後置された形式の使用状況について記す。

3. 1. 連詞“而”が挿入された形式

“而”は古典漢語に用いられる連詞の中で接続関係を示す類に属し、二つの単語またはフレーズに成立する並列や累加等の関係を示す。介詞“以”と連用される場合、“而”は関係詞として原因または条件を表現する部分に配され、“而”以後の部分で結果が掲示されている[3)]。

この形式は、次のような構成となっている。

“以”＋ A（名詞）＋“而”＋B（動詞・形容詞）

原因・条件　　結果・結論　　AによってBする

例えば、『大学』「第二段」“可以人而不如鳥乎（「人を以てして鳥に如かざる可けんや」）。”では、“人”であることを条件として“不如鳥”の状態になることの禁止が“以～而～”の使用によって表現されている。

『法華経』に見られる例文を次に挙げる。

(23)T09-0023A

今者宮殿光明、昔所未有。以何因縁、而現此相。(化城喩品)

今者宮殿の光明、昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以て此の相を現ずる。

(24)T09-0033A

彼国諸仏、以大妙音、而説諸法。(見宝塔品)

彼の国の諸仏、大妙音を以て諸法を説きたもう。

(23)では既に挙げた表現“何因縁”が原因となり、“以”が前置されて“現此相”を発生させる条件が形成されている。(24)では“大妙音”が原因となり、同様に“以”の前置によって“説諸法”を発生させる条件が形成されている。

3. 2. “以”が対象に後置された形式

世界で用いられる言語では、対象を表示または導き出す語彙は常に対象の直前に配されるとは限らず、直前に配される前置詞(preposition)と直後に配される後置詞(postposition)の二種類が存在する。漢語の場合、太田1958:249は介詞を用いた連語の形式について記し、介詞連語は被修飾語の前に置くか後に置くかの二用法があると主張している[4)]。

ここでは、『法華経』文中に見られる“是”“為”“何”に“以”が後置された例を挙げ、各形式の使用状況と表示効果について記す。

3. 2. 1. “是以”

直前に掲示された内容を指示する近称指示詞“是”が対象となる場合には、“以”が“是”に前置された表現だけでなく、“以”が後置された表現“是以”も存在する。例えば、『韓非子』「五蠹」“是以人民衆而貨財寡、力労而供養薄、故民争(「是を以て人民衆くして貨財寡く、力労して供養薄し、故に民争ふ」)。”では、“民争”の原因の説明に“是以”が用いられている。

『法華経』文中では、次の例文が挙げられる。

(25)T09-0016C

是以愍勲、毎憶其子。(信解品)

是を以て愍勲に毎に其の子を憶う。

(25)では時間を指示する近称指示詞“是”が対象となり、“以”の後置によって現時点に於ける発生を示す「この時」が表現されている。“以”の前置による類似の表現“以是”は(21)(22)でも使用されたが、“是以”により表現された時間帯は、同じく現時点を表現した(21)“以是”に近いと判断される。

3. 2. 2. “〜以為”

“以”は認定を示す動詞“為”との共起によって〔“以”+A(名詞)+“為”+B(名詞)〕(AをBとする)を形成し、『法華経』では例文として「見宝塔品」“所化之国、亦以瑠璃為地、宝樹荘厳。(「所化の国、亦瑠璃を以て地と為し、宝樹荘厳せり」)。”が挙げられる。この表現でも、“以”と対象を示す語彙との位置が逆転した形式“〜以為〜”が存在する。例えば、『詩経』「氓」“将子無怒、秋以為期(「将はくは子よ怒る無かれ、秋を以て期と為さん」)。”では、“秋”を“期”

とする意志が“～以為～”によって表現されている。

『法華経』文中では、次の例文が挙げられる。

㉖T09-0033A

種種諸宝、以為荘校。(見宝塔品)

種種の諸宝、以て荘校とす。

㉗T09-0035B

甄叔迦宝、以為其台。(妙音菩薩品)

甄叔迦宝を以て其の台とせり。

㉖では“種種諸宝”が“荘校”、㉗では“甄叔迦宝”が“其台”としての価値を認められる過程が表現されている。何れの場合でも“～以為～”の表示機能は“以～為～”と殆ど変わらず、目的語に当たる㉖“荘校”㉗“其台”の文字数が全ての語彙の配列に影響を与えたと解釈される。

3. 2. 3. “何以”

既に挙げた形式“以～故”は、“以”の対象となる部分に疑問詞“何”を挿入し、原因や理由を尋ねる表現“以何故”を形成することも可能である。この表現についても、“以”が“何”に後置された“何以故”の使用が『法華経』文中には確認される。

例文を次に挙げる。

㉘T09-0013A

何以故、若全身命、便為已得、玩好之具。(譬喩品)

何を以ての故に、若し身命を全うすれば、便ち為れ已に玩好の具を得たるなり。

王力1963：1074では、“以”を含む介詞構造による工具や方式等の表示、原因や理由の表示に用いられる“由”とは類似の表現に“何以”は含まれ、前者の用例として『春秋左氏伝』「荘公」“問何以戦(「問ふ、何を以て戦ふ」)。”、後者の用例として『史記』「項羽本紀」“不然、籍、何以至此(「然らずんば、籍、何を以て此に至らん」)。”が挙げられている。

4. おわりに

本稿では、“以”を含む介詞構造の『法華経』文中に於ける使用状況について調査した。その結果、行為を実行する工具・方法、状態が発生する原因・理由を導き出す表現が特に多いことが判明した。また、既述の時間帯を導き出す“以是”の場合、それが現時点を示すか現時点から始まる長期間を示すかは、後続する内容に基づき微妙に異なることも理解できた。これらの“以”と類似の機能を発揮する介詞として、黎錦熙1998：148は“将”“為”を挙げ、牛島1967：257は“用”が使用されていた可能性を指摘している。

“以”の対象となる語彙は、工具・方法を導き出す表現では“方便”、原因・理由を導き出す表現では“因縁”の使用が特に多く、他に“菩薩”“譬喩”“供具”“妙音”等の使用も確認された。

その殆どが抽象的事物であり、具体的事物である場合でも抽象的な性質が濃厚であることが特徴として認められる。

本稿では、更に“以”を含む介詞構造の上記以外の様々な形式についても紹介した。その中で、“以”が対象に後置された形式“是以”“～以為”“何以”は、対象に前置された場合と意味は同じと解釈されるため、文字数または発音等の事情により発生した現象と捉えられた。

〈注〉

1）各例文の直前には、『大正新脩大蔵経』（全83巻，1925年初版，大正新脩大蔵経刊行会）の中で該当部分が記された巻数と頁数を付した。また、参考として『訓訳妙法蓮華経并開結』（井上四郎編輯，1957年初版，平楽寺書店）に見られる書き下し文も例文の直後に掲示した。

2）古典漢語の“是”と“此”の指示機能に関しては、『身延山大学仏教学部紀要』創刊号（2000年10月）にて記述。

3）“而”及び“而且”の品詞名は「接続詞」とする書籍も多いが、本稿では中国で使用される状況を尊重して「連詞」を用いる。また、古典漢語の“而”の語義と使用条件、『法華経』に於ける使用状況に関しては、『身延山大学仏教学部紀要』第２号（2001年10月）にて記述。

4）太田1958：249では、介詞連語を被修飾語の前に置く用法の形式は〔介詞—体言—動詞〕、後に置く用法の形式は〔動詞—介詞—体言〕〔動詞—体言—介詞—体言〕と表示されている。

〈参照文献〉

牛島徳次1967.『漢語文法論（古代編）』大修館書店。
王力1963.『古代漢語（第三冊）』中華書局。
太田辰夫1958.『中国語歴史文法』江南書院。
張玉金2004.『西周漢語語法研究』商務印書館。
鳥井克之2008.『中国語教学文法辞典』東方書店。
黎錦熙1998.『新著国語文法（漢語語法叢書）』商務印書館。

キーワード

工具　理由　時間　前置　後置